

漢学\*と明治初期の知性\*\*  
—— 近代知性の「基体」としての十八世紀以降の  
漢学世界における学問発展

*Confucian studies in the Tokugawa period and the  
modern intellectual foundation*

竹村 英二  
Eiji Takemura

*Abstract:*

*Intellectual history and literary studies of Meiji Japan infer the significance of Confucianism, or, more specifically, the role of 朱子学 scholarship in the Tokugawa period that helped develop the modern intellectual foundations in Japan. However, no study of these fields has as yet revealed which specific elements of the Confucian text study and/or teaching had helped develop intellectual foundations and in what specific way. In fact, it was the study methods developed among the mid-to-late Tokugawa ‘empiricist’ Confucians that they deployed to investigate pre-Han texts, and the way it was taught at domain schools and private institutions (shijuku) that appeared to have been crucial in nurturing the scholarly habitus of the late-Tokugawa and early-Meiji intellectuals.*

*Text study methods that embraced meticulously detailed bibliographical and philological research, and the study of pre-Han language - words, grammatical rules, and phonetics peculiar to the ancient Chinese - for the better exegeses of classic texts, evolved in eighteenth-century Japan, particularly among Ken’en (Sorai) and Kogaku-ha scholars. Amongst them, Yamanoi Kanae, Nemoto Bui, and Dazai Shundai, the Sorai disciples, and Ito Togai of Kogaku-ha were the key figures.*

*The late eighteenth century saw a substantial development of ‘empiricist’ Confucians in Japan, despite the regulations imposed by the Tokugawa Shogunate (such as the one so-called ‘Kansei Prohibition of Heterodox Learning’). They methodologically owe a great deal to Ken’en and Kogaku-ha methods, and also to the increasingly influential Ch’ing ‘empiricist’ scholarship (清代考据学) that saw a massive evolution in 乾隆 and 嘉慶 periods. On the other hand, it was such a remarkable book as 『七經孟子考文』 compiled by Yamanoi and Nemoto (published in 1731) that decisively set the direction of Ch’ing China empiricism in the eighteenth century, so, it was indeed an intellectual interaction between the both sides of Japan Sea that enhanced scholarly*

*development in the era. The Bakumatsu 'empiricist' Confucianism helped develop the scholarly foundations of such influential Meiji intellectuals as Kume Kunitake, Nishi Amane, and even Nakamura Masanao, usually considered a 朱子学者, who played a critical role in their absorption of new knowledge.*

*The increase in book circulation in Tokugawa Japan, especially the massive increase in the proportion of imported Chinese Classics in the eighteenth and nineteenth centuries were highly responsible for the methodological development as briefly sketched above. For this reason, an intensive study of the ideas and literature prevailed in society in accordance with the expanding circulation of the book is of prime importance.*

*Though educational history studies, namely the voluminous works by Ishikawa Ken and Takeda Kanji, have uncovered study curricula employed in domain schools, and illustrated specific examples of instruction given by teaching staff in those schools, virtually no attention has been paid to what helped develop the 'mode' or habit of study that nurtured shared intellectual foundations. Such Tokugawa texts as Dokusho Junjo written by Tanaka Chishu, a Kimon School Confucian and a delegated Confucian school instructor of the Domain of Isezaki, and Jugyo-hen by Emura Hokkai, a foremost 'amalgamated school' Confucian thinker of the eighteenth century, not only reveal school regulations and the texts used in schools but show in meticulous detail how the texts were to be studied, and how individual and group study was to be conducted, which must have been decisive in forming one's intellectual habitus. Educational methods revealed in the texts mentioned above were duly deployed in domain schools and shijuku, and that had surely been a factor that helped develop the academic foundation of the early-Meiji intellectuals, that made them an able entity capable of encountering the language and culture of the West.*

キーワード：日本思想史、漢学、考証学、近代知性、十八世紀儒学

## 漢学 — “負の遺産” として/近代知性の基盤として

明治初期の知識層、ことに「啓蒙知識人」諸氏による儒教批判、彼らの徹底的な儒者/漢学者との「決別宣言」の数々は枚挙に遑がない。福澤諭吉 § (一八三五—一九〇一) は謂うに及ばず<sup>[1]</sup>、もと昌平黌教授であった中村敬宇 (一八三二—九一) も、「漢学不可廢論」(二) にて、「漢学者ハ、或ハソノ自カラ信ズルノ甚シキヨリ、世ニ孔子ノ学ヨリ正シキモノナシ、孔子ノ学ニ外ナル者ハ皆異端邪説ナリトセ」る「狹隘ノ見」、その「自カラ一偏ニ流レテ、孔子ノ真意ト矛盾スルヲ知ラザル」様相を批判する。その後段では「吾邦ノ漢学者モ多クハ堯舜禹湯ノ經濟、文武周孔ノ薪伝ヲ研究スルコトヲ為サズ (中略) 所謂經学家ハ大抵文字章句ノ論ニ止リ、古董ノ古物ヲ玩ブガ如キニ過ギズ。所謂詩文家ハ大率浮華ニ流レ、實際ニ疎シ」と糾弾、彼らは「プログレス (日進) (進益) トイフコトヲ曉ラズ、コレソノ洋学ノ上流ヲ占ラル、所以ナリ」とする。<sup>[2]</sup> この明治二〇年 (一八八七年) の演説のはるか以前、安政年間に綴られた「論学弊疏」にも既に、「今ノ所謂漢学者ハ、徒ニ文字章句ノ末節ニ思ヲ疲ラセ、勢ヲ憊ラセテ、復タ其ノ実用如何ヲ顧ミズ」との批判がみえる。<sup>[3]</sup> 西周も、「(漢学は—筆者) 書籍手寄りの学」であり、その「奴隸となり使役せらるる」漢学者を批判する。<sup>[4]</sup>

しかしその一方、たとえば中村はさきの「漢学不可廢論」最終節である「(四) 漢学ノ基アル者ハ洋学ニ進ミ非常ノ効力ヲ顯ハス事」にてかく語る。

「今日洋学生徒ノ森然トシテ頭角ヲ挺ンデ前程万里ト望ヲ属セラル、者ヲ觀ルニ、皆漢学ノ下地アル者ナリ。漢学ニ長ジ詩文ヲモ能クスル者ハ、英学ニ於テモ亦非常ニ長進シ英文ヲ能シ、同儕ヲ圧倒セリ。某々哲学士ノ如キ、余ガ大学教授タリシ時、其詩若クハ文ヲ閲シ其英オヲ嘆賞シタリシガ、今ハ或ハ哲学書ヲ著ハシ、或ハ政学書、或ハ小説ヲ著ハシ、儼然トシテ各一家ヲ成セリ。ソノ時コノ諸士ト同級ニ居リシ者モ、漢学ノ下地アル等級ニ随ヒ、亦皆高下ヲ異ニセリ。漢学ナキ者ハ、固ヨリ哲学科文学科ニ入ルコト能ハザリシナリ」。<sup>[5]</sup> 「古典講習科乙部開設ニツキ感アリ書シテ生徒ニ示ス」においても、「方今洋学ヲ以テ名家ト称セラル、者ヲ觀ルニ、元來漢学ノ質地アリ」とされ、「漢学ノ素ナキモノハ、或ハ七八年、或ハ十余年、西洋ニ留学シ帰国スル後ト雖モ、頭角ノ嶄然タルヲ露ハサズ」「殊ニ翻訳ニ至リテハ決シテ手ヲ下ス能ハザルナリ」と極論している。<sup>[6]</sup>

森田思軒 (一八六一—九七) はヴィクトル・ユーゴー、ジュール・ヴェルヌらの文学作品の周密な翻訳家として名をなした人物である。森田ははじめ、「支那の文章」は「細密なる脳髓より生じたるもの」ではないとし (「日本文章の将来」、一八八八年、二十七歳時)、「漢文臭気を帶る」文章を避け、その「文典上の法則」に縛られぬ「詞の置方」を獲るべし (同) としていた。<sup>[7]</sup> しかし、とくに一八九一年の早稲田大学における講演を境に漢学の不可欠性を力説するようになる。「我邦に於る漢学の現在及び将来」では、「我邦の道德は全く儒者の言を棄つること無かるべし」「又た文章のうへより言ふに、我邦の文章は全く漢文の体裁と句法とを脱して其外に超然すること能はざるべし」と論じ、さらには「(漢学は—筆者) 学問世界の一方に燦然たる光明を放ちて拉丁学と比肩し、否な我邦に在ては拉丁学の上位に拠りて占坐するの日あるべしと思ふ」とまで述べる。<sup>[8]</sup> 森田は備中の生まれで、同郷の碩学、阪谷朗廬 (一八二二—八一) が主宰する興讓館で漢学を修めた期間も含め、長く漢学学習に従事した。柳田泉は、(思軒は)「明清の漢文を手本」としたとし、徳富蘇峰は「思軒の学は漢七欧三」といい、中江兆民 (一八四七—一九〇一) をして「翻訳は故森田思軒最も佳なり」と絶賛せしめた。<sup>[9]</sup> その兆民も、漢語とは「三千年來磨きに磨いた」もので、「漢

文の長処」は「其文章が強く又余韻があつて人を感動させる力が多く、その古典中に「実に神韻の文章」多いとする。<sup>[10]</sup>

かく語る知識層の知的背景、知的基盤は、間違いなく「漢学」であり、上に挙げた三人も例外なくこの点は一致して認めている。総じて、「徒ニ文字章句ノ末節ニ思ヲ疲ラセ」る（「論学弊疏」、前出）ごとくの漢学者の知的「性癖」、固陋、蒙昧のハビトゥスが糾弾される一方で、洋学受容における「知的基盤」としての漢学の素養の不可欠性が指摘される。

明治三年（一八七〇）生まれの西田幾多郎（～一九四五）は金沢の四高にて三宅真軒（一八五三～一九三四）のもとで漢文を習ったが、真軒は安井息軒（一七九九～一八七六）の高弟井口孟篤の門弟、その「学風と云へば、漢学では最も厳密な学問的（ママ）と云ふべき清朝の考証学であつた」と西田は述懐する。（「三宅真軒先生」<sup>[11]</sup>）同じ年に書かれた「古義堂を訪ふ記」では、「日本的」なる「学問的方法」の特質として、「事物」「真理」「深い真実」の把握への志向があり、漢学研究においても「宋儒的な理論を排して、孔孟の根本的事実」への「復帰」が目指され、「日本精神には理よりも事へといふ特徴がある」と強調する。<sup>[12]</sup> さらに、「西洋は学、東洋は教、学よりも教と云ふ人には、往々仁齋徂徠の学の如きを軽視する傾があり、「特に徂徠の学の如きは恰も無用の学であるかの如く考へる人もあるが、これは大きな誤りで、日本の学問発展においては、「漢学者の復古学」による「刺戟」が殊更重要であつたとする。<sup>[13]</sup>

西田が「理よりも事」の重視を「日本精神」と直結させるのは牽強といえよう。彼はまた、「闇斎を尊重するに吝なるものではない」<sup>[14]</sup>とも述べるが、しかし、西田における仁齋・徂徠以来の高い考証学的、書誌学的水準に関する記述、徂徠の学問が「山井鼎の著書七経孟子考文を通じて清朝の学問に影響し」、「後に至つて、我国の学問」に「影響」したとする<sup>[15]</sup>この哲学者の指摘は、無論、吉川幸次郎（一九〇四～一九八〇）ら京大で同僚であつた漢学者連中との知的交流を前提としよう（後述）が、(a) 漢学の素養が、「道德」「倫理」の「教」としてではなく、「真理」「深い真実」「根本的事実」（傍点＝筆者）の考証的追究のための「学」として重要であつたとしていること、(b) その学的基盤が、十八世紀に淵源するものとしていることの二点において注目に値しよう。これらはまた、旧制高等学校の教育課程の実際において、考証学の碩学から直に漢学教育を受けた哲学者の実体験として、注目されるべきものと筆者は考える。

いわゆる「漢学世代」ではない吉川幸次郎は、言語研究も含め、仁齋、徂徠らにおいて発展した学問を、「表面は彼等との非連続を宣言しつつ、しかも実はその主張」を「集大成」したものとして本居宣長の国語/国学研究を位置づけ、翻つては「一種の古義学」として、「実証学」として東涯の学を「完成」させたものとして宣長学を位置づける。<sup>[16]</sup> 吉川は、「徂徠の次の時代の日本の学問の選手は、本居宣長であり、儒学は「下降の時期」と断じ<sup>[17]</sup>、幕末考証学への発展の系譜にはあまり積極的な評価を示さない。世代的には西田ら漢学世代と吉川の間位置する村岡典嗣（一八八四～一九四六）は、吉川以前に徂徠、そして新井白石から国学への学問方法発展のながれ、ことに伴信友の実証研究・書誌学的研究の発展を指摘、こと日本思想史学の学問方法の基盤としての、この系譜での資（史）料の批判的考証の緻密化、釈義と理解手法の体系化の顕著な発展を指摘する。<sup>[18]</sup> 逆に近代史学の創始者久米邦武（一八三九～一九三一）、重野安繹（一八二七～一九一〇）、そして大久保利謙（一九〇〇～一九九五）らは、幕末までに清代考証学も包摂しながら発展した儒学における実証研究こそが近代以降の実証研究・書誌学的研究の屋台骨であり、彼ら自身が国史学

を確立させるにおいて受容を試みたランケ史学に対する優位性すら語る。<sup>[19]</sup>

かく、江戸後期～幕末を代表する「学問の選手」が誰であったか、近代の知的基盤の“祖型”は誰のどのような学問であったか、さらにはそれらが近代学問のどの分野の発展に貢献したかについては、吉川、村岡、西田、久米・大久保らの間で差異がある。また、思軒は「漢文の体裁と句法」をいい、兆民は「文章」の強さ、「余韻」といった文学的重要性をいうが、本稿では、敬字をして「儼然トシテ各一家ヲ成」す「下地」として位置づけられる漢学の素養が何であったかに着目する。とくに具体的に注目したいのは、(a) 国史、思想史をはじめとする「実証研究」の知的基盤として、(b) 洋語の言語研究/洋学受容の学問的基盤として、である。「(a)」については村岡の研究が具体的な学問手法の次元でのことも含め大いに参考となり、久米・大久保らの指摘も加味しての再整理が有効であろう。「(b)」に関しては下の「(2) 漢学と近代知性－「言語研究」を中心としたもの」に挙げた諸研究と、江戸中期以降発展をみた言語研究とを参照しながらの考察が有効と考える。

江戸後期までに清代考証学の手法も包摂しながら発展した日本漢学の学問方法で注目すべき点は、一方においてその学問的基盤が、洋学受容、それも含めた経験的（実証的）学問の発展の基盤となったこと、さらにはこれと相俟って、儒学世界特有の世界観・価値観の体系からの学問としての自己回転を促し、客観的かつ自立的な知的体系を形成、儒学の世界観に規定されるところの思惟様式、或は学問的ハビトゥスからの解放にも寄与した点である。後者についてはこれまでも、下の「(1) 漢学（儒学）と近代知性－思想史学的研究」で挙げた思想史の諸研究などからの指摘があり、本論で主題とする問題とも根底において深く関連するものであるが、本論ではあえて、思想史（学的アプローチを通してこの点の論究に向かうことを忌避する。その理由は、まずは幕末漢学の学問方法の特質を具に考察し、それに鑑みながら、その方法に宿るところの思惟様式の析出を目指すことから始めるのが有効と考えるからである。このような基本認識のもと、まずは、漢学はこれまで、どのような意味で有用と考えられていたかを、以下の三つの軸をもって整理したい。

### (1) 漢学（儒学）と近代知性－思想史学的研究

これまでの思想史的、政治思想史的研究、とりわけ松沢弘陽、安西敏三、井田進也、宮村治雄、松本三之介らの研究は、「漢学」というよりも「儒学」、とりわけ朱子学の問題、世界観、道徳観をもつての近代知識人の西洋受容、そこにおける知的基盤としての儒学の役割についての考察を試みている。<sup>[20]</sup> これらは主に、(a) 儒学「教養」や「理念」の組み替えに着目したもの、(b) 個々の思想家におけるこれらのプロセスでの内面の葛藤、屈折に着目するものなどである。<sup>[21]</sup> 松本論文は、阪谷朗廬、中村敬字、福澤諭吉を題材に、朗廬については、彼が理/気、体/用、道/器といった対概念をもって、佐久間象山の「東洋道徳/西洋芸術」といった二分法的理解を超えた「理気合一」を説き、「実地ニ就キ、切磋商究スル」を「修学ノ要務」としたと指摘する。<sup>[22]</sup> 中村敬字は、洋学の学習も「儒者分内の事」とし、「(西洋の) 発達を根底において支える精神やエートスを問題とし、朱子学の世界観、道徳観とキリスト教のそれを結びつけ、逆にそれをもって儒学に「歴史的変動に堪えうる普遍性」を付与したとする。<sup>[23]</sup> 中江兆民の「西土ノ道学ハ希臘矢蘇易（曷－筆者）刺篤、必羅頼（頓－筆者）ニ原本ス、而テ二賢ノ道ヲ論ズル、仁義礼智ヲ外ニセズ」との論（兆民「策論」）の根底にも、朗廬、敬字らの思惟に通底する意図があろう。松本は、朗廬、敬字らの西洋受容が、「儒学との連続性を保ちながら」（傍点－筆者）、その「観念が意図的に動員され」、「有効



な媒体としての役割を与えられ」ながら進められた点に留意すべきとする。<sup>[24]</sup>

これに対し中村春作は、共有されている知的習慣、とくに江戸後期～幕末の知的制度一般を対象視し、「国民的教養」形成に関わっていく儒学知とその変質を、歴史社会学の知見を援用しながら考察することを目指す。<sup>[25]</sup> 中村がとくに「素読」を軸とする読書習慣に着目するのに対し、前田勉は、儒学教育のもう一つの重要な課程である「会読」を通じた知的鍛錬に着目、この、指導者からの上意下達の指導への盲従的恭順を前提としない教育課程が、異なる知的素地、とくに「討論力」を醸成し、幕末の「処士横議」活発化の知的土台となったことを論じる。<sup>[26]</sup> 松本、源、前田（勉）らの研究は、儒学的教養から近代的知性への「脱皮」という構図、近代への「離陸」を描き、予定調和的構図の中での整合的説明に傾く傾向が強いともいえる。<sup>[27]</sup> しかしこれらの研究は、(a) 教義（経義）解釈史的研究（主に中国学研究）、(b) 「文学的」儒学研究（主に中国文学、日本漢文学研究）の方法をもっての研究とは異なる視点からの、十九世紀日本における儒学の役割を明確に示すものである。

この問題と関連するが、兆民が漢学を重視した理由について、それは兆民が漢文を「論理的思考を展開するための実験的言語」と位置づけ、「馬場辰猪が英語に求めた論理的役割を、兆民は漢文に求め」たためであり、「東アジア文化圏が西洋文化を取り入れる」において不可欠のものとしたためとするのは飛鳥井雅道である。<sup>[28]</sup> これを敷衍し、「兆民の『民約論』翻訳に際しての、書き下し文、仮名交じり文からの「漢文」の「復元」＝新たな創造」が「新たな思想言語の獲得」のためであったとするのは中村春作である。<sup>[29]</sup> 兆民が『民約訳解』等で漢文を使用した理由が、伝統的漢学・経学世界への「回帰」を目指したためではなく、「実験的言語」としてのその活用、「新たな思想言語の獲得」を志向した故であったとする両者の指摘に筆者は賛同する。しかし、漢文、というより漢学の素養は単に「論理的思考」能力を付与するものではない。また、中村春作の、兆民の漢学教養は「伝統儒学の経書注釈の世界」とは異なるものであったとの指摘<sup>[30]</sup>は重要であるが、兆民の『民約訳解』漢訳過程、即ち原文→書き下し文→漢文をもっての再「復元」、再咀嚼、再解釈<sup>[31]</sup>の「やり方」を規定した知的要素は、とくに十八世紀以降の漢学・経学「研究」を通じて発展をみた学問方法と無縁ではなかったということ、さらには、その方法は訓読、素読のみではなく、旧制高等学校において実際に漢学教育を享受した哲学者西田の談（前出）にあったごとのものであったというのが筆者の立場である。そして、この「伝統的」知的基盤は、江戸後期～幕末の「知識層」、即ち兆民よりもはるかに本格的に「正統的」漢学教育に浴する機会を得た層における西洋思想理解において、さらに強固なものであったと考える。

## (2) 漢学と近代知性－「言語研究」（「近代言語学」ではない）を中心としたもの

漢学と近代知性に関する思想史的研究とはまったく別軸の研究であるが、とくに言語の学的发展と関連する諸研究がある。まず挙げたいのは、(a) 国語学的研究の業績であり、とくに「記述言語学」の形態的研究法を応用したのものがある。筆頭は森岡健二の諸研究であり、氏の『近代語の成立（語彙編）』（とくに第四～七章）、同『同（文体編）』、同『欧文訓読の研究』<sup>[32]</sup>は特筆すべきものである。森岡を継承した進藤咲子、御法川牧子、栗島紀子らの諸業績も有用である。<sup>[33]</sup> 斉藤毅『明治のことは』も、この方面での業績に数えられよう。<sup>[34]</sup>

これらは、明治初期の翻訳において、漢学が不可欠であった点に着目する研究であり、さらに山

田孝雄の研究がある。<sup>[35]</sup> 但し、森岡、進藤、御法川、栗島らの仕事は重要な知見を提供するものの、基本的に研究対象が「語彙」レベルの問題に限定される。

次に、(b) 国文学的研究の業績と類別されるべき諸業績がある。森田思軒の翻訳の特徴とされる「周密体」の訳語研究を題材とした小森陽一の業績<sup>[36]</sup>、山田博雄『中江兆民 翻訳の思想』<sup>[37]</sup>、そして斉藤希史の諸業績もこの研究分野に入ろう。とりわけ斉藤『漢文脈と近代日本』は、近代知性の問題を念頭におきながら、文学の基盤的素養としての漢学の素養に着目した業績<sup>[38]</sup>で、注目に値する。また斉藤は、明治初期よりの日本語形成と漢語の意義と役割、漢文教育などについての業績<sup>[39]</sup>など、精力的に成果を生み続けており、本稿ならびに筆者の他の論考の主題ともかかわる論考も多い。

さらには、(c) 通訳翻訳学の諸業績が挙げられよう。まずは、柳父章の『翻訳とはなにか：日本語と翻訳文化』、同『近代日本語の思想：翻訳文体成立事情』、同『翻訳語成立事情』といった一連の著作。<sup>[40]</sup> 柳父、水野、他編著『日本の翻訳論：アンソロジーと解題』<sup>[41]</sup>、とくに「漢文訓読から西洋文訓読へ」、「漢字造語 - 日本の翻訳の要」は、「漢語」を介在項とする洋語の訳語の変遷が具体的な用語例をもって示される。同論集の執筆者でもある水野的、長沼美香子、コックリル浩子、落合陽子、田辺紀久子、斉藤美野らは柳父の翻訳語研究の継承者であり、漢語を不可避的介在項とした翻訳の進展に関する業績を残す。

さきの森岡『近代語の成立』をはじめとする研究は、「文体」学習と成立の問題をも研究対象とするが、基本的に「語彙」レベルの研究であり、漢語を介しての洋語受容、初期には漢語が重要な役割をはたすも、暫時「和製漢語」化し、漢字を使いながらも日本語独自の語彙が生成され、それが文体の変容にも影響するプロセスの考察を主題とする。「思想」次元の問題にも重要な示唆を与えるも、「国語学」的研究の範囲内の業績であるといえよう。

これに対し、「語彙」次元ではなく、文章理解における漢学的素養の役割を、初期蘭語研究、幕末の英語研究の手法/英語教授法の詳細の検討を通じて析出したのが茂住實男『洋語教授法史研究：文法＝訳読法の成立と展開を通して』、同「適塾の教育－教育方法と教授組織を中心に」である。<sup>[42]</sup>

前者の第1章－1では、蘭語の単語各々に適当する漢語を逐字的にあて、助語辞を識別、さらに「白文に訓点を施して読む」要領で蘭文全体を把握、解読する文法＝訳読法の成立過程を考証する。つまり、蘭語の、とくに文章単位での習得は、「漢文」という、漢字を日本語と共有しながらも異なる語序、文章特性をもつ言語の理解方法の選択的活用をもってなされた。

また、漢学学習法の効用について、とくに可能表現、当為表現の訳出と訓読技法の役割を考察したのが、斉藤文俊『漢文訓読と近代日本語の形成』<sup>[43]</sup>、とくにその第四章、第五章第三節、第六章第三節の論考である。

### (3) 漢学と近代知性－近代史学的方法的基盤として

幕末考証学が「朱子学的窮理から離れた古典の考証、それからみちびかれた実証的史学を指すもの」であった<sup>[44]</sup>とは大久保利謙の指摘であり、近代国史学の始祖の一人とされる重野安繹「先生は考証学時代の産物にて、歴史学を開くには此基礎に立たれ」、「星野（恒）博士は（昌平黌教授）塩谷岩陰の高弟で亦考証家である」とは久米邦武の弁である。<sup>[45]</sup>「因て国史研究は考証一点張にて進み、西洋の帰納法と抱合し」、「以て今の歴史学を形成」した。<sup>[46]</sup>

中山久四郎「考証学概説」<sup>[47]</sup>、金谷治「日本考証学派の成立－大田錦城を中心として」<sup>[48]</sup>は幕末考証学の特徴を詳述する。幕末考証学とは基本的に「反道学」であり、反朱子学的“自由性”を保持、官学的道学を嘲笑するニヒリズムを有し、「史学史上からみる場合にはもっとひろく考証の学風として解釈する」べしとするのは、さきの大久保である。<sup>[49]</sup>これが、明治以降の近代学問としての考証史学・実証史学研究の方法的基盤となったとの論は、久米『歴史著作集』第三卷、『重野博士史学論文集』上・下<sup>[50]</sup>、大久保『日本近代史学史』<sup>[51]</sup>第五章「歴史的認識の諸問題」、中村久四郎「清朝考証の学風と近代日本」<sup>[52]</sup>などが一様に指摘するところである。具体的には、明和～天明期の井上金峨（一七三二－一八四）、吉田篁墩（一七四五－一八九八）、化政期の大田錦城（一七六五－一八二五）、松崎慊堂（一七七一－一八四四）、狩谷掖斎（一七七五－一八三五）、幕末期の東條一堂（一七七八－一八五七）、安井息軒らにおいて発展をみた、ヨリ正しい古義の考証にむけた史料学的、書誌学的研究は、道学的儒学と一線を画する高度な史料主義的考究手法を完成せしめたといえよう。

かような学問方法との相乗的發展をみたものに、『本朝通鑑』『大日本史』等大規模な歴史書編纂作業における古書・古記録等の史料蒐集と分類、吟味、鑑定、印章等の確認、異本との対校作業といった研究手法があり、のちの「古文書学」の発達、ならびに考証・実証の方法的端緒は、むしろここにあったとの論もある。<sup>[53]</sup>日本独自の古文書学の発達に関する指摘は、上に挙げた『重野博士史学論文集』、とくに上巻の第一編「国史汎論」六「学問は遂に考証に帰す」、久米『歴史著作集』とくに第三卷「史学・史学方法論」、大久保『日本近代史学史』にもある。しかし、近世初期、林羅山の学問態度に既に「一種の合理主義・現実主義の史観がその背後にあ」り<sup>[54]</sup>、徂徠－春臺を軸とする経学の経験的方法の発展を経て、独自に考証の学が発達しつつあった明和～天明期に「実事求是」の清代考証学が入るといふ、儒学「研究」の一連の流れは、日本儒学の特質としての「実証」「考証」の深化を象徴するものといえよう。古文書学の発達も、儒学「研究」の方法的進展との兼ね合いのなかで考えられるべきであろう。また、篁墩が受容の端緒であった清代の考証学は、掖斎においては漢唐注疏学のみならず説文学・金石学をも包摂、大田錦城、松崎慊堂らにおいて日本考証学の樹立をみた。<sup>[55]</sup>のちこれらを渋江抽斎らが発展的に継承、さらには日本考証学が逆に清に輸出されたのは、中村久四郎、久米、重野、大久保らの前掲諸書にも指摘がある。

ここで問題とすべきは、具体的に、幕末考証学のどのような考証・実証の方法・手法が、いかなる意味において近代史学の基盤となったかである。重野、栗田、大久保、久米らは、考証学の具体的内容と近代史学の方法的特徴とを緻密に比較検討することはない。彼ら自身がかような学問方法の実践者であり、その方法的特質を研究対象として客観化するに及ばなかったのがその理由であろう。さきに挙げた金谷の錦城研究、波多野太郎による一堂『老子王注』研究（後述）などは、あくまで「日本儒者の中国学研究の水準」の知見を提供するが、近代知性との関連は全く語られることはない。本稿の主題との関連でいえば、この点の検証が枢要と考える。

### 漢学と近代知性－幕末漢学のなにを、どう研究するか

以上、三つの軸をもって、儒学/漢学の効用についてのこれまでの議論の一応の整理を試みたが、江戸後期よりの知的連続/屈折を通じて形成された「知的素養」とは、いかなるものであったか。“表出された思想”の基底をなす“暗黙の信念”、「共有されている知的習慣と（その）集合的意味」と



いった側面を、「知的制度一般を外側から対象視する姿勢」をもって考察することが重要である<sup>[56]</sup>が、リンガー、シャルチュエによる著作を援用しながら、この面の/このアプローチからの儒学的/漢学的素養のもつ意味の重要性に注意を振り向けたのは、前出の中村春作である。<sup>[57]</sup> 中村はとくに、「素読」が醸成するところの知的習慣を挙げ、「制度」としての素読という「読書体験」の醸成する「近代の素養」を描く<sup>[58]</sup>が、中村の関心、着地点は「近代」の「国民国家論」の中での教養である。<sup>[59]</sup>

一方、中村の問題提起を起点に、江戸後期～幕末に醸成され、明治初期の知的活動を下支えした「知的基盤」「知的習慣」そのものの詳察と、どのような根底的素養が培われたかについて更に掘り下げた考察は可能であろうか。

また、リンガー、シャルチュエ、D.F.マッケンジーなどによる歴史社会学的研究は、特定の理論的枠組のうちに史実/史料を“埋め込む”かたちの研究が多く<sup>[60]</sup>、これらの知見を援用した日本思想史研究も、理論枠組を分析視角として思想分析に援用するにとどまる傾向が強い。筆者は、社会学・心理学・言語学等の知見、理論的・分析的枠組を勘案しつつも、基本的には、思想史外在的な方法をもってきての思想分析ではなく、研究題材自体、史料に即しての研究、それを通じて分析視角を獲得することが重要であると考え。一方、逆に、たとえば精密な実証研究を旨とする「近世教育事実史」の諸研究（後述）は、上述のごとくの歴史社会学の視座、分析視角を全く欠如させるものが多い。また、漢学の学問方法で注目すべきは、必ずしも中村春作が指摘する「素読」「会読」のみではない。「会読」も、後述するように「討論」力を醸成するのみの教育手法ではない。

これらを念頭に、次節以降においては、いかなる漢学の学問方法の実践、或は漢学教育が、どのような学問的素養、或は「知的習慣」を形成し、明治以降の「知的基盤」の醸成にどう寄与したかについて考えるが、筆者がとりわけ重要と考えるのは、

- (1) 江戸後期～幕末までに高い水準での達成をみた中国古典籍理解のための書誌学・文献学・校勘学の研究手法、さらには古代言語理解手法の特質の研究、
- (2) 殊に一七三〇年代の『七経孟子考文』の清への伝来を画期に活発化した清代考拠学とその十八世紀後半～十九世紀前半における日本への影響、それらの中核に、さらには洋学の影響も相まって発展した東アジア海域全体での経験主義的漢学研究の飛躍的発展の様相の把握、
- (3) 上に挙げた二つの方向での学問発展を踏まえた、それらの醸成するところの「知識層」における知的基盤に関する研究である。

このうち(2)の全体像の把握は一論文で説明し得る主題ではないので、本稿と同時並行で筆者が進める共同研究の成果を俟ちたい。本稿では以下、江戸中～後期漢学者における校勘学、実証研究の発展に絞って論じたい。加えて(1)と(3)に挙げた主題について、本稿と前後して筆者が進める研究も参照しながら論じたい。

#### (A) 儒者/思想家次元において

(a) 近代知性の「基体」として決定的な役割をはたした要素としてまず筆者が挙げたいのは、十八世紀はじめ、とりわけ荻生徂徠（一六六六―一七二八）―太宰春臺（一六八〇―一七四七）、伊藤東涯（一六七〇―一七三六）らにおいて発展をみた字句、助語辞などの緻密な分析、さらには文の体、法の研究である。さらには、(b) 徂徠門下の山井鼎（一六九〇?―一七二八）、根本武夷（一六九九―一七六四）らを端緒とする校勘の学の発展である。『七経孟子考文』が乾隆・嘉慶の考証学の発展

の端緒であるのは既に狩野直喜、吉川幸次郎らが指摘するところだが、また一方で同書は、明和～天明期の井上金峨、吉田篁墩、化政期の大田錦城、松崎憐堂、狩谷棧斎、さらには幕末の東條一堂、安井息軒らに直接的に受容されている。かような東アジア海域での学問状況は、この地域における校勘学を進展せしめ、幕末日本において詳密な実証研究、ヨリ正しい古義の「考証」を目指す研究を進展させ、近代においては史学などの分野での史料主義的考究手法の発展の基盤となった。<sup>[61]</sup>

一堂の『老子王注』の完全復元にむけた文献学的達成、彼の『論語知言』『詩経標識』、さらに息軒『管子纂詁』『左伝輯釈』などに顕著な字句・語句の傍搜博引、清代考拠家の説の周到な傍引に象徴的な知的水準<sup>[62]</sup>は、洋語/洋学の「進ミ難キニ至」った段階（即ち“上級”段階－「漢学不可廢論」、後述）において枢要な知的基盤として、さらに、のちの人文科学的研究方法発展の基盤としても特筆すべきものである。

また、(c) 徂徠・春臺、そして東涯らによる、異なる語序、文章特性をもつ古代中国語の客観化、外国語としての言語理解の方法策定を目指す努力は、独自の言語研究を進展させた。徂徠、東涯らにおける言語研究の発展は吉川、岡井眞吾らも指摘するところ<sup>[63]</sup>だが、これらにおいて発展したどのような知識或は技術が、敬宇らの指摘する洋学受容に役立ったかを具体的に特定することが重要と考える。

さて、(a) に関しては筆者は既に、拙稿<sup>[64]</sup>にてその一端の解明を試みた。以下、その要点を述べると、春臺は、古文各々に特有の法・体の「識得」とその体系的理解を重視、「体ハ文選ニ分タルガ如シ」「明ノ呉訥ガ文章辨体、徐師曾ガ文体明弁ニ是ヲ弁ズルコト甚詳ナリ」と具体的な書名を挙げ、賦・詩・騷から辞、さらには墓誌・行状・弔文・祭文まで三十九種の『文選』に示される文体への通曉をいう（春臺「学則」〈『倭読要領』下所収〉）。さらには「森厳」なる韓・柳の「文法ニ通達」すべし（同）と主張、徂徠の古文辞「習熟」重視、服部南郭の「似習」を先、習法を後とする主張などと異なる持論を展開する。

徂徠は、とくに古文辞との出会いを契機に、言語「分析」より「習熟」、言語「研究」よりパッチワーク重視に至ったのに対し、春臺は一貫して言語「分析」をもつての体系的言語（華言）理解を目指した。無論、文の体裁、法への言及は春臺以前にもみられるが、これらの格別な重視とその徹底した識得の主張は、春臺がその端緒であったといえよう。

春臺以降の徂徠の系譜の儒者、翻って徂徠学とは別に、或はそれを批判するかたちで発展をみた、(i) ヨリ正しい古義の「考証」、(ii) 助語辞も含め細かな字句の研究への傾注を特徴とする研究の考察も有用と考える。具体的には、伊藤東涯の助語辞研究、言語研究、片山兼山、山本北山らの古文研究、皆川淇園の助語辞研究などの考察が有効と考える。<sup>[65]</sup>

(b) に関しては拙稿「『論語知言』における権、道義と業務」<sup>[66]</sup>で一堂の考証学、書誌学に清代考証学の達成が十全に反映され、その実証の詳密さ、精度の高さに特筆すべきものがある点について論究した。清代考証学は久米邦武においても、彼の佐賀藩弘道館での就学時代を中心に鋭意摂取され、ここに、特定の説に偏ることのない兼採の姿勢が獲得され、その後の彼の実証的学問の基盤となった。この様相については拙稿「久米邦武と『尚書』研究－清代考証学と宋・元・明経学の兼採の様相」にて分析を試みた。<sup>[67]</sup> 紙幅の制限故これ以上詳述しないが、これら二名の考証学者の学的特質に関しては拙稿を参照されたい。西田幾多郎が考証学者安井息軒の直系の漢学者の薫陶を受けた事実については前述したが、これら考証学の学問的内実の具体相の考察は、明治初期以降の

学問の特質を考える上で重要といえよう。

(c) に関しては、とくに古典漢文の原語序、原音、原イントネーションでの習得を首唱した徂徠『訳文筌蹄』の「題言十則」、それを発展させた春臺『倭読要領』に呈出される、「言語の学」としての儒学研究の発展が重要な意味をもった。徂徠については、吉川幸次郎「徂徠学案」<sup>[68]</sup>、とくに第一、二節、田尻祐一郎「〈訓読〉問題と古文辞学」<sup>[69]</sup>があり、さらには戸川芳郎「解題」<sup>[70]</sup>、黒住眞「『訳文筌蹄』をめぐって」<sup>[71]</sup>も日本儒者と言語/外国語の問題についての興味深い知見を提供する。春臺については拙稿（研究展望）「訓読と翻訳－太宰春臺『倭読要領』を中心に」<sup>[72]</sup>、岡田袈裟男「太宰春臺と言語の学」<sup>[73]</sup>がある。

春臺『倭読要領』は、徂徠の問題意識を継承、語音、音韻の説明、譯読の深さを「当時として比肩するもののない水準」に進化させた書（戸川、前掲「解題」）である。また、「漢文ノ条理、血脈ヲ識得」す（『倭読要領』中巻、四十九）べく従頭直下で、そして華音で読み、読むに四声、七音、清濁、開合などを精微に稽え（同、巻上、十五～）、「助語辞マデニ目ヲ属ケ」（同、巻中、三十八、四十九）、「句法、字法」（同、巻中、四十九）、「編法、章法」（同、巻中、四十）の倭・華での異同、変化を考え、「句読」にも意を注ぎ、「倭訓」で大略をおさえるのではなく、「文義ノ差誤」（同、巻中、四十）に意を用いて執拗に古書、古聖賢の一言一句を識得するにむけた知的努力の体現としての書である。また、それ故に、「言語の学」としての精密を追究する書であり、音韻、文法を中心に「すぐれて方法的」な書である。

岡田袈裟男が評するごとく、『倭読要領』は、「言語の学としての精密」の飽くなき追究に基づく、「言語それ自体に潜む個々の事象」を個々に処理し、「包括的な意味」を析出する学術的努力の到達点である。またそれは、方法的にも徂徠『訳文筌蹄』の意図を継承、格段に発展させたものであった。<sup>[74]</sup>

かような性質の書である『倭読要領』においてすすめられる読法・読解法の言語の学としての吟味、言語へのアプローチにおける方法的独創性の考察は、江戸中期における、その思想環境「場」に胚胎する/言語研究の遂行により醸成される思想的発展への我々の注意を喚起し、その思想的考察の対象としての重要性を呈示しよう。

徂徠と春臺との相違点は、(1) 徂徠も、『訳文筌蹄』の考案初期段階とされる頃（二五－六歳）から、「崎陽の学」に非常にこだわるが、その刊行時（四五－六歳）ぐらい迄には、「第二等の法」としての「此法ノ読法」の併用を唱える。そして、（徂徠の）『学則』段階（六一歳）までには、直読への強いこだわりは後退した。これに対し春臺は、相当な水準での原語の直読を基盤とした「倭語ノ読」みを主唱。「原語」への意識の高さは、最終的には徂徠においてよりも春臺において維持されたのである。さらに、(2) 徂徠が古文辞の「習熟」を唱え、言語の体系的理解をあえて止め、読者（作者）自身を古文辞に「投げ込む」方向に進んだのに対し、春臺は、「習熟」を基盤とした辞の「聯綴」だけでは不十分であるとし、体系的・方法的理解へのこだわりを保持し続けていた。<sup>[75]</sup>

十八世紀以来の儒学研究の進展において発達をみた上述のごとく的方法的・技能的特徴、さらには言語の学としての格段の進展の具体相の考察が、幕末以降本格化する洋学受容を考える上で重要といえよう。

## (B) “知識層” 次元において

上に論じたような、人口属性的には“思想家次元”<sup>[76]</sup>において醸成された知的基盤の問題に加え、

一定の「知識層」における、リンガーに倣っていうところの「慣習・制度により恒久化させられていった“隠然たる”」、そして「共有される」「知的習慣」、とその醸成要素の検討も不可欠であろう。これ即ち江戸後期～幕末の藩学、郷学、漢・洋学の私塾などにおける、「下見」「聴講・聞書（含、質講）」「返り視（復習）」といった、習熟を十全たるものとするための細かい学習手法とその制度化、実践についての研究である。具体的には、

(a) 石川謙、武田勘治らの「近世教育事実史」に分類される教育史研究、即ち、「下見」「聴講・聞書（含、質講）」「返り視（復習）」を包含する素読課程、会読課程（即ち当時の「知的制度一般」）の詳察、幕末－明治初期の知識層に「共有されている知的習慣と（その）集合的意味」の「醸成のされ方」を詳細に物語る教育過程を描き出す研究<sup>[77]</sup>、さらには、(b) 茂住實男の諸研究<sup>[78]</sup>が明らかにする、素読課程、会読課程の実相、ならびにそれが蘭語、英語学習の場においてそのまま踏襲されている様相などを勘案しながら、知的基盤醸成のしくみの制度面、実際の効用面での考察を行うのが有用である。これについては拙稿「江戸後期における儒学テキスト読解の作法」<sup>[79]</sup>において考察を行った。

拙稿では、『読書準繩』『授業編』などに主唱される下見、講釈、質講・会読（輪講）、後見（復読/返り視）といった包括的学習課程が熾烈な競争的勉学を奨励、学習効果を高めるための一体的な教育過程として実践されていたことを先行研究も勘案しながら踏まえ、これに「被」教育者の各々の学習過程について語った記述を重ねあわせ吟味することをもって、企図された学習方法がどの程度実践され、いかなる知的習慣の醸成に寄与したかを明らかにした。「被」教育者側の、自らが享受した教育に関する記述に平沼淑郎『鶴峯漫談』<sup>[80]</sup>、菊池（箕作）大麓の講演録<sup>[81]</sup>、石河幹明『福沢諭吉伝』所収の記述<sup>[82]</sup>などがあるが、たとえば『鶴峯漫談』には、「意義の解釈には師弟共に渾身の力を入れて、微細の点も軽々看過しなかつた」とあり、これはすべて、「漢学修習の遺風をそのまゝ継承した」ものとある（傍点－原文）。「輪講」における相互批判の熾烈さは「戦場に出る真剣味」を有し、「ロンドン条約案」検討の「委員会に於ける首相外相海相の席に出る前」のごとくの「苦労」を強いる性質のものであったとの述懐がある。これらの記述と、『読書準繩』をはじめとする江戸中～後期における学習指南書の記述は相同的である。たとえば平沼は、下見（予習）は「たゞ尋常一様の予習」ではなく、「難詰」に適宜対応すべく「腐心焦慮」、周到な字句・語句の意味の精査、解釈が不可欠の過程であったと述懐する。これ即ち『読書準繩』『下見』の項における「一字云云§ノ文義ヲ明ラメ、能語勢ヲ看テ一字一句ノ輕重ヲ認得テ、某ノ句ハ某ノ句ヨリ生シ、某ノ字ハ某ノ字ト照應スルヲ看」るべしとの指南と通じる。平沼が怠らず行ったとする「復習」は「日課の一つ」で、「業余の業ではな」かったとするが、これも、自省的に間違いを問い詰める復習を講義当日の夜に行うことを指南する『読書準繩』の「復読」に通じる。

そして、「輪講」である。平沼のいう「戦場に出る真剣味」、「首相外相海相の席に出る前」のごとくの「苦労」を強いる性質の輪講は、『読書準繩』にて質講が「婦女ノ衣ヲ洗フ」ごとくの鍛錬に例えられ、足で踏みつけ揉みシゴき、「垢ヲ去リ」清水で濯ぐごとく要領でなされるべきもの、質講が「師友ニ痛ク戒メラルハ」「真剣勝負」として位置づけられるのに相通じよう。

かく、「漢学修習の遺風」、即ち周到な字句、語句理解などの下準備を前提とする下見、容赦のない質疑応答を旨とした“旧来の”漢学の学習課程は、議論の内容のみならず、一体的有機的に読み方、議論の「形式」、その「やり方」を規定し、「被」教育者において綿密なる考証、実証作業の要



諦が徹底的に叩き込まれ、それはまた洋学学習において大いに継承されたのである。

上に論じたことと深く関連することが、中村敬宇「漢学不可廢論」で論じられている。

「予倫敦ヨリ歸リシ初メ、兎輩ヲシテ漢学ヲ廢シテ専ラ英学ヲ為サシメタリ。然ルニ兎輩ノ英学ノ業始メノ程ハ進ミタレドモ、進ミ難キ所ニ至ツテ止マレリ。予是ニ於テ漢学ヲ廢セシメタルコトヲ悔ユ。曰ク、恨ムラクハ漢学ニ従事セシメ、少シナリトモソノ魂魄ヲ強カラシメザリシコトヲ。予又幼年ヨリ洋行シテ中年ニ歸朝セシ者ノ一兩輩ヲ見タリ。語学ハ上達シタルノミニシテ、亦皆進ミ難キ所ニ至ツテ止マル者ノ如シ。之ヲ漢学ノ基アリテ洋行シタルモノニ比スレバ、タゞ霄壤ノ差ノミニ非ズ」

また曰く、

「漢学ハ、ソノ六ツケ敷且ツ数多ナル字ヲ覚ユルバカリニテ、脳髓ヲ勞ラカシ、得失相償ハズト、西洋人ガ往々言フコトナレドモ（中略）一語ヅ、ソノ字綴リヲ覚ヘ、一語ヅ、ソノ音ヲ覚ヘザルベカラズ。矢張脳髓ヲ使ハザレバ出来ヌ事ナリ。又支那字ト同様ニ、ソノ字ヨリ組合セタル語ノ形画ヲ目ニテ覚ヘルナリ」（同）

「漢学」研究によって培われた「魂魄」をもたない者は「進ミ難キ所ニ至ツテ止マ」り、それをたたき込まれた者との差は「天と地との隔たり（霄壤ノ差）」よりもさらに甚だしいと極言する。敬宇はここで、「魂魄」、即ち精神と形体を各々掌る陰陽の気を厳密にどのような意味で使っているかは明示していない。また、同じ「漢学不可廢論」において、「古董ノ古物ヲ玩ブガ如」く「文字章句ノ論ニ止」どまることを批判するのも本稿の冒頭で触れた。しかし敬宇は、「漢学ヲ廢セシメタルコト」を「悔」い、「漢学」研究で培われる「魂魄」を「強カラシメ」ること、「漢学ノ質地」「漢学ノ素」（本稿冒頭に引用の文言）を獲得することが不可欠であることを殊更強調する。その要諦は、詳密な字・句の義の理解、その用法、字・句の微細なニュアンスの識得、のみならず、字・句や文章の語源に関する知識、歴史的な意味変遷の理解、文の体・法の識得、さらには訓詁、書誌の学といった知的営みを必然とする、まさに漢学学習の遂行過程を通じて徹底的に鍛えられる性質の知的基盤であり、これが、彼の考える洋学「上級編」、即ち「進ミ難キ所」を突破する枢要であると論じているとすることができよう。

そして、「漢学不可廢論」の最後（四）は以下のように結ばれている。「思慮深キ人ハ」「数千年ノ旧キヲ経タル國（中国）ノ事ヲ知ラント欲」すとの言葉を含む James Legge の *The Chinese Classics* 序言<sup>[83]</sup>を引いたあと、

「レッグ氏詩経ニ二訳アリ。其一ハ、支那經典ノ中ニ在リ、原文ニ依リ、敢テ自ラ放マ、ニセズ。其一ハ、英詩ノ体裁ニ擬シ、自由ニ訳シタルモノナリ。余近ゴロ莊子ノ英訳ヲ購得セリ。漢学者若シ英学ヲ為サント欲セバ、右等ノ諸書（敬宇は Legge の英訳した四書、書経、詩経、春秋ならびに左伝を前段で挙げている）ヲ漢英比較シテ読ムトキハ互ニ發明スルコトヲ得、ソノ有用ハ論ヲ俟タズ、樂趣亦限リナカルベシ。余ハ兎輩ヲシテ一時漢学ヲ廢セシメタルニ懲ルコトアリ。故ニコノ論ヲ為シテ学士諸君ニ質スト云フ爾リ」<sup>[84]</sup>

漢学者が英学を学ぶにあたっては、四書、書経、詩経、春秋ならびに左伝、即ち *The Chinese Classics* に訳出された経書にあたり、それらを「漢英比較シテ読ム」ことを推奨している。さらにここでは、その前段にある『詩経』に「二訳」あって、「原文」に忠実で「敢テ自ラ放マ、ニ」していない訳と「英詩ノ体裁ニ擬」し、「自由ニ訳シタル」訳との比較検討が有用との主張にも注目



したい。これは、翻訳を根本的に「哲学する」行為であるとする「翻訳哲学」、とりわけラドミラルのいう「起点言語主義」「目標言語主義」の問題にも関わるものである。原文重視の「起点言語主義」に対し、訳出「される側」の「パロールやディスクールの意味」を重視する翻訳が「目標言語主義」<sup>[85]</sup>で、上原麻有子はこれを、「目標言語に本来ある表現方法（傍点－筆者）を活用することによって翻訳する」行為とする。<sup>[86]</sup> ラドミラルは翻訳を、「翻訳者の活動としての活動実践」であると同時に「結果としての目標テキスト自体（傍点－筆者）」と定義<sup>[87]</sup>するが、本稿との関連で重要なのは、英語テキストの翻訳・理解における「目標言語」の水準である。さきに敬字が、「漢学ノ質地」なきものが「殊ニ翻訳ニ至リテハ決シテ手ヲ下ス能ハザル」と述べているのを想起されたい（前出「古典講習科乙部開設ニツキ感アリ書シテ生徒ニ示ス」）。ここで敬字が問題としている英語文献翻訳の「目標言語」は日本語であるが、敬字は、英語力のための日本人は、和訳時の目標言語、即ち彼らに（ある意味で母国語として）本来的に備わる表現方法とその活用力が著しく低く、目標テキスト自体を創造し得る能力を欠如させるとする。また、この創造的営みの水準は、漢学の知的基盤を有した者によってのみ維持され得るとするのだが、敬字がここで言及するのが漢語ならではの文学的、或は修辭的な豊穡さ、語彙の微細なニュアンスを感得する素養のみであったとするのは、些か短絡的にすぎよう。彼は、字義・句義の理解、語源や語彙の変遷についての知識、文体や文法への通暁、さらには漢字を日本語と共有しながらも異なる語序、文章特性をもつ言語をコンテクスチュアルに勘案しながら理解し、それをもってテキストを創造するといった能力の必要性にも言及する。ここにおいて重要な要素が、十八世紀から曲折を経ながらも連綿と発展してきた漢学の様々な実証研究の諸手法であり、江戸後期～幕末考証学につながる知的基盤である。

かく、敬字がとりわけ重視するのは、英語「そのもの」の力、或はネイティブが流暢に会話するようなレベルの語学力の獲得といった方向の話ではなく、古代中国テキストとの格闘を通じて醸成された知的技術の力量である。そしてこれこそが、西周のいう「熟練」「組織セル念慮」「観念ヲ以テ結合」する能力、「概括」力も内包した、「唯踏襲模倣」するのみでない、或は単なる実証、経験主義的な素養とも異なる、「観念ヲ以テ」の「結合」といった作業も内包した合理的に総合する高度に知的な作業の遂行能力であり<sup>[88]</sup>、慣習・制度として“恒久化”させられるところの“隱然たる”知的習慣、或は知的行為における「認知的性向」「文化的前意識」（リンガー）<sup>[89]</sup>の醸成要素であったといえよう。

## 小 括

以上を要約すると、上の〔A〕で挙げた三つの軸での個別研究を通じ、古代中国語の字句、文言の熟慮、文の体、法の識得、和語と異なる語序、文章特性への高い意識などを枢要とする言語理解の方法、精密な書誌学的・考証学的方法がどのようなものであったかが析出できよう。これらの考察は、どのような学問方法が、近代知性の醸成と発展にいかに関与したかの解明に重要な基盤的知見をもたらそう。さらには、〔B〕で示したような、儒者/学者に教育されるところの知識層の学習空間における、慣習・制度として“恒久化”させられるところの“隱然たる”知的習慣、それに形成される「文化的前意識」、知的営みにおける「認知的性向」の解明は、それらの連関のなかで醸成される「共通の知的基盤」がいかなるものであったかを呈示しよう。これらを有機的に連関させ

での分析は、十八世紀以降の日本の漢学世界において進展した漢学「研究」の何が、どのように近代知性の基盤となっていたかについての一つの構図の呈示につながると考える。

幕末期の朱子学泰斗による、宋学的知主義・合理主義の析出努力、或は朱子学から西洋哲学に対抗し得る哲理を析出する“哲学的”営みについては、本稿の「漢学（儒学）と近代知性－思想史学的研究」の節にて触れた。戦後から一九九〇年代あたりまでの政治思想史の分野での朱子学研究の多くはこれを主題とし、書誌、校勘に終始する考証学とは異なる儒学像、儒者像を呈示した。しかし、ともすれば、この幕末朱子学者と戦後の研究者による二重の“読み替え”作業は、幕末までに発展してきた漢学の学問方法への一面的な理解を助長した面もあるのではないかと。即ち、重野、久米、星野らの世代、そして狩野直喜（一八六八―一九四七）、狩野亨吉（一八六五―一九四二）、内藤湖南（一八六六―一九三四）、そして哲学者西田（一八七〇―一九四五）あたりの世代までの「漢学の素養」とは、どちらかといえば窮理云々とは異なる、本稿で論じたごとくの研究手法の体得をもって醸成されたものであった。彼らにおいて自己同一的に、ほぼ皮膚感覚で共有されていた幕末漢学とその醸成する知的基盤は、時を隔てた戦後の研究者には動もすれば等閑視され、幕末朱子学者による“哲学的”営みのみが偏って取り沙汰され、賞揚された面があるのではないかと。無論、これも幕末儒学の一側面ではあるが、近代の知識層に発展的に受け継がれた「知的基盤」の問題を考えるにあたっては、幕末の考証学、そしてそれへの発展の淵源である十八世紀の学問について、有機的に具に考察することが有効であると考えられる。

- 
- \* 「漢学」と「儒学」が各々何を指すかは状況規定的ともいえよう。即ち宋代以降の学問に対する、主に漢代における注疏の学をさして「漢学」と称するケース、それが清代の学問を指し示すケース、或はとくに校勘・書誌に傾注する「学問」としての儒学を強調する場合などがある。本稿が主題とするところは、日本漢学世界において発展した学問方法とその近代知性醸成における役割であり、とくに十八世紀以降の日本儒者による古代テキスト研究発展の過程で進展した「学問方法」とその十九世紀中葉までの展開、さらにはその幕末－明治初期における知的基盤としての意義であるが、主題とするのは「漢学」、とりわけ「日本漢学」であって、「儒学」そのものではない。従って本稿では、原文、或は他の研究者の論考に「儒学」とある場合ならびにその見解説明においてこの語の使用が不可避である場合はこれを使用する（これはとくに、「(1) 漢学（儒学）と近代知性－思想史学的研究」の節で顕著である）が、主題は「漢学」であり、原則この語を使用する。
- また、この点の措定の要求も含め、本論の査読者からは多くの貴重な批判、提言をうけた。十全に活かしきれていないのは偏に筆者の責任であるが、ここに感謝の意を表したい。
- \*\* 本稿作成に先立っては、日本経済思想史学会 定例研究会（二〇一一年七月十六日、於：慶應義塾大学）、国際日本文化研究センター 笠谷班定例研究会（二〇一二年二月五日、於：日文研）、国際研究集会 ‘Japanese Economic Thought’（二〇一二年八月二十七～二十九日、プラハ・カレル大学にて開催）にて報告の機会をいただき、会員・班員、学会参加諸氏から貴重なご批判、ご助言を賜った。ここに感謝の意を表したい。

§ 本稿では原則、略字体を用いた。但し人物名、ならびに「慶應」「昌平黉」は正字体のままとした。句読点のない引用文に関しては筆者が適宜それを付した。原文に「漢字送り」が使用されていない場合はそのまま引用し（例：「云々」を「云云」〈『読書準繩』〉）、かな文字も原則原文のまま用いた（例：「シッカリト」と「シツカリト」を併用〈『読書準繩』〉）。

† 本稿では、学術・教育機関における一定の学習・作業の順序や範囲、内容に言及する場合は「課程」を、ひろく物事の発展、変化の進行或は様相について言及する場合、または概括的な学習のプロセス・内容に言及する場合は「過

程」を用いる。小学館『日本国語大辞典』（第二版、二〇〇一年）においては、「過程」とは「物事の生成、変化、発展の進行しつづける様相。また、経過する一連の道すじや現象」、「物事の、連関的で合法的な進行」とされ、「課程」は「学校などで、ある一定期間に割り当てて行わせる、学習・作業の範囲」などと、特定の学術・教育機関における限定的な学習・範囲を示す。本稿はこれに準じてこれらの語を用いる。

## 註

- 1 齊藤希史は、『福澤諭吉全集』「緒言」（同第一巻所収）の、「俗文中に漢語を挿み」「雅俗めちや――に混合せしめ」て、「恰も漢文社会の靈場を犯して其文法を紊乱し」、これをもって「世間の洋学者を磊落放膽に導き漢学を蔑視せしめんと」する福澤諭吉の企図を指摘（引用の文言は慶應義塾〈編纂〉『福澤諭吉全集』〈岩波書店、一九六九年〉、五一―六頁）、かような試みは、漢学的素養の優劣を根拠とする抑圧的階層性、或は知的「階梯性」の破壊を目的とした福澤一流の「臨機一時」の戦略であったと指摘する（齊藤「文体と思考の自由－福澤諭吉の射程」〈『福澤諭吉年鑑』三七所収、八二頁〉）。また、拙稿「明治の知識層における漢学不可廃論の諸相－近代知性の基盤と漢学の学問方法」（笠谷和比古、上村敏文編『日本の近代化とプロテスタンティズム』〈教文館、二〇一三年四月〉）も参照。『福翁百話』（『全集』第六巻所収）において福澤は、「古來我国に行はれたる漢学は学問として視る可らず」と断罪、それは「陰陽五行の空を談じて万物を包羅し」、「現在のみを妄信して改むるを知らず」、「多言にして実証に乏し」いものと罵倒する。漢学は学問ではないとするが、ここでの批判の根拠は「陰陽五行」について空談し、「妄信」的であることで、これは、西田が幕末漢学（考証学）の特質として挙げた「事物」「深い真理」の把握への強い志向性（後述）とは真逆であるのは注意したい。
- 2 中村「漢学不可廃論」（一八八七年）（二）漢学者ノ弊ヲ論ズ（本平讓編『敬字中村先生演説集』〈松井忠兵衛、一八八八年〉所収）。
- 3 『敬字文集』巻之一所収。
- 4 「百学連環」（『西周全集』第一巻〈日本評論社、一九四五年〉）。
- 5 前掲「漢学不可廃論」。
- 6 『学芸志林』七〇冊所収。
- 7 森田「日本文章の将来」は山本正秀（編著）『近代文体形成史料修正：発生編』（桜楓社、一九七八年）所収。
- 8 同演説は『早稲田文学』七、九号所収。森田「翻訳の心得」「翻訳の苦心」（日本近代思想大系十五『翻訳の思想』〈岩波書店、一九九一年〉所収）、「作家苦心談」にも同様の主張あり。詳しくは拙稿、前掲「明治の知識層における漢学不可廃論の諸相－近代知性の基盤と漢学の学問方法」を参照。
- 9 各氏の森田評価については拙稿、前掲「明治の知識層における漢学不可廃論の諸相－近代知性の基盤と漢学の学問方法」参照。
- 10 幸徳秋水「兆民先生」（『兆民全集』別巻〈岩波書店、一九八六年〉所収）。
- 11 『西田幾多郎全集』第十二巻（岩波書店、一九六六年）、二一三頁。
- 12 同、二一八―一九頁。
- 13 同、二一八―二〇頁。
- 14 二一八頁。
- 15 同、二一九―二〇頁。
- 16 宣長学を仁齋、徂徠の「集大成」とするのは吉川「『古事記伝』のために」、それを「一種の古義学」と形容するのは同「伊藤東涯」、「宣長の学問、それは実証学である」とは同「本居宣長－世界的日本人」における吉川の言である。すべて『吉川幸次郎全集』第十七巻（筑摩書房、一九六九年）所収。これとは別の問題意識から徂徠学⇒宣長学の発展の系譜を呈出したのはいうまでもなく一九四〇―四四年に書かれ、のち『日本政治思想史研究』（東京大学出版会、一九五二年）にまとめられた丸山眞男の一連の論文であり、とくにその第一論文「近世儒教の発展における徂徠学の特質並にその国学との関連」（『国家学会雑誌』、一九四〇年）である。吉川「伊藤東涯」は一九四二年十月に行った講演の記録であり、「本居宣長」はその一年前（一九四一年）に『新風土』に所収されたもの。丸山第一論文はこれに先立つ。ただ、丸山論文は吉川の上の諸作品の主題、そして本稿の主要論点、研究方法とも少し異なるので、ここでは立ち入らない。また、徂徠学⇒宣長学の学問系譜の指摘において、どの側面においてどちらが「先」か云々は特定しがたく、また本稿の課題とするものでもない。
- 17 吉川「受容の歴史」（同上、『全集』第十七巻所収）。
- 18 とくに思想史学における資料の批判的考証、即ち資料の真偽、制作の時代・場所の考証方法の確立、そして「所謂訓詁注釈」、即ち「語句の意義の解明」に出発、帰納的・文法的基礎をもつての考証の確立について論じたのは村岡「『続・日本思想史研究』（岩波書店、一九四〇年）第一部三「日本思想史の研究法について」（引用箇所

は三七、三九、四三頁)、伴信友の実証学については同『日本思想史研究』(岩波書店、一九三〇年)「近世史学史上に於ける国学の貢献」、『日本思想史研究 第三』(岩波書店、一九四八年)所収の「徂徠学と宣長学との関係」もこの方法的発展系譜の具体例を祖述する。

- 19 久米『歴史著作集』第三卷「史学・史学方法論」(吉川弘文館、一九九〇年)、第一編「史学の独立と研究」第七「余が見たる重野博士」。また、重野『重野博士史学論文集』上・下(雄山閣、一九三八―三九年)、大久保『日本近代史学の成立』(著作集第七卷、吉川弘文館、一九八八年)。
  - 20 たとえば松沢『近代日本の形成と西洋経験』(岩波書店、一九九三年)のほか、安西『福沢諭吉と西欧思想：自然法・功利主義・進化論』(名古屋大学出版会、一九九五年)、井田進也『中江兆民のフランス』(岩波書店、一九八七年)、宮村治雄『理学者 兆民：ある開国経験の思想史』(みすず書房、一九八九年)、同『開国経験の思想史：兆民と時代精神』(東京大学出版会、一九九六年)、さらには松本三之介「新しい学問の形成と知識人－阪谷素・中村敬宇・福沢諭吉を中心に」(日本近代思想大系十『学問と知識人』〈岩波書店、一九八八年)「解説」などは、各々異なる方向性の思想研究でありながら、基本的かつ枢要な問題として「儒学」「漢学」と「近代知識人」の知的基盤の関係性に着目する、この方面での必読文献であろう。安西『明治日本とイギリス』(甲南大学総合研究所、二〇〇八年)、井田『歴史とテキスト：西鶴から諭吉まで』(光芒社、二〇〇一年)も示唆に富む。
  - 21 中村春作『江戸儒教と近代の「知」』(ぺりかん社、二〇〇二年)、第三章における整理。また同章注三四の諸文献も参照。
  - 22 松本、前掲「新しい学問の形成と知識人」「二 儒学の展開と洋学の受容－阪谷素の場合」、とくに四三二、四三五頁。
  - 23 同、「三 洋学をめぐる伝統と近代－中村敬宇の学問観」、とくに四三八―四五頁。引用の文言は同四三九、四四一頁。
  - 24 同、四四三―四八頁。引用の文言は四四七―四八頁。
  - 25 中村、前掲『江戸儒教と近代の「知」』、とくに第二、三章。
  - 26 前田『江戸後期の思想空間』(ぺりかん社、二〇〇九年)、第一編。
  - 27 中村、前掲書七〇頁の指摘。
  - 28 飛鳥井『中江兆民』(吉川弘文館〈人物叢書〉、一九九九年)、一五四頁。
  - 29 中村春作「訓読、あるいは書き下し文という〈翻訳〉」(『文学』第十二巻第三号〈二〇一一年五、六月〉、岩波書店)、六〇頁。
  - 30 同、五八頁。
  - 31 同、六〇頁。
  - 32 森岡『近代語の成立』三部作はともに明治書院より刊行。「語彙編」は一九九三年、「文体編」は一九九一年。但しこれらの書は、過去三十年以上の蓄積によった業績で、早期の論考、たとえば「明治期語彙編」は一九六九年のもの。森岡『「自由之理」の訳語－その英華字典との関係』(『日本文学』〈東京女子大学〉第十八号〈一九六二年〉)も有用である。
  - 33 とくに進藤「文章が近代化すること－福沢諭吉と二葉亭四迷とを中心に」(一九八〇年度始業講演－短期大学部)、『東京女子大学紀要論集』〈東京女子大学論集編集委員会編〉第三一号〈一九八〇年〉、同「漢語・漢字の実態(明治)」(『季刊文学・語学』〈日本古典文学会／全国大学国語国文学会編〉第四一号〈一九六七年〉)、栗島紀子「訳語の研究－西周を中心に」(『日本文学』〈東京女子大学〉二七号〈一九六六年〉、のち森岡、前掲『近代語の成立(語彙編)』所収)。
  - 34 齋藤毅『明治のことは：東から西への架け橋』(講談社、一九七七年)。のち副題を「文明開化と日本語」とし二〇〇五年に発行。
  - 35 山田孝雄『漢文の訓読によりて伝えられたる語法』(宝文館、一九三五年)。
  - 36 小森陽一「行動する『実境』中継者の一人称文体－森田思軒における『周密体』の形成」一(『成城文芸』〈成城大学文芸学部〉第百三十三号〈一九八三年〉)。
- 同「『局外』「傍観者」の認識－森田思軒における『周密体』の形成」二(『成城文芸』〈成城大学文芸学部〉第百四号〈一九八三年〉)。但しこの二論文とも、日本語の「漢語からの脱却」を標榜する姿勢、思軒が漢語とは別個の「独自の文学表現の獲得」を模索していたとする論が過剰で、たとえば思軒が一八八二年以降ことさら漢語／漢文の体・法・語勢、語彙を重視するに至った点などが看過され、結果、偏った見解の提示に陥っている。また、余談だが、思軒は漢学の素養を「拉丁学の上に拠りて占坐」するものと、最大限重視するに至るも、漢文にある常套句、とくに典語、文語の訳語としての無制限な採用は原文の所与の状況にひきずられる作用があるため、これに対し極めて慎重である。これは、たとえば井上哲次郎『哲学字彙』の漢文訳において、ふん



- だんに儒学に常套的な字・句、概念が採用され、極めてその色彩を帯びた西洋哲学用語訳となっていること、また、朱子学か漢唐の学か、陽明学か等々には無頓着な訳となっているのとは対照的である。
- 37 慶應義塾出版会、二〇〇九年。また、同「翻訳の思想－福澤諭吉と中江兆民」(『福澤諭吉年鑑』〈福澤諭吉協会〉第三七号〈二〇一〇年〉)。
- 38 日本放送出版協会、二〇〇七年。
- 39 齊藤希史『漢文脈の近代：清末＝明治の文学圏』(名古屋大学出版会、二〇〇五年)、同「文体と思考の自由」(講演記録、『福澤諭吉年鑑』三七〈二〇一〇年〉所収)、など。
- 40 『近代日本語の思想』は法政大学出版局刊、二〇〇四年、『翻訳とはなにか』は同出版局刊、一九八五年、『翻訳語成立事情』は岩波書店刊、一九八二年。
- 41 法政大学出版局、二〇一〇年。
- 42 『洋語教授法史研究』は学文社刊、一九八九年、「適塾の教育」は『学校教育研究所年報』〈学校教育研究所編〉第三八号〈一九九四年〉所収。同「蕃書調所の英語教育」(『英学史研究』〈第十六号、一九八三年〉)も有益な知見を提供する。
- 43 勉誠出版、二〇一一年。
- 44 大久保、前掲『日本近代史学の成立』、三五頁。
- 45 久米、前掲『歴史著作集』第三巻「史学・史学方法論」第一編「史学の独立と研究」第七「余が見たる重野博士」、一一七頁。
- 46 同。
- 47 中山『近世日本の儒学』(岩波書店、一九三九年)所収。
- 48 源了圓編著『江戸後期の比較文化研究』(ベリかん社、一九九〇年)所収。
- 49 大久保、前掲『日本近代史学の成立』第七巻、三四、三五頁。
- 50 雄山閣、一九三八－三十九年。
- 51 白揚社、一九四〇年。
- 52 『讀史廣記』(章華社、一九三三年)所収。
- 53 たとえば宝月圭吾、高橋正彦(編集担当)『日本古文書学の展開』(『日本古文書学論集』1、吉川弘文館、一九八六年)、今井登志喜「西洋史学の本邦史学に与えたる影響」(史学会編『本邦史学史論叢』下〈富山房、一九三九年〉)、栗田元次「書誌学の発達」(同、下)、大久保「近世に於ける歴史教育」(同、上)など。
- 54 大久保『日本近代史学史』(白揚社、一九四〇年)、第五章「歴史的認識の諸問題」、七四－七五頁。
- 55 前掲『重野博士史学論文集』上、「国史汎論」。
- 56 Ringer, Fritz K., *Fields of knowledge: French academic culture in comparative perspective, 1890-1920*, Cambridge University Press, 1992 (邦訳：F. リンガー著、筒井清忠ほか訳『知の歴史社会学：フランスとドイツにおける教養、1890-1920』〈名古屋大学出版会、一九九六年〉)。引用箇所は日本語版、一二頁。
- 57 中村、前掲『江戸儒教と近代の「知」』、とくに第三章。
- 58 もっとも素読と近代知性の関係について中村以前に指摘したのは前田愛『近代読者の成立』(岩波書店、一九九三年)である。
- 59 中村、前掲『江戸儒教と近代の「知」』、第四、五章。
- 60 たとえば Chartier, Roger, *Pratiques de la lecture*, Marseilles, Rivages, 1985 (邦訳：R. シャルチュエ著、水林章、ほか訳『書物から読書へ』〈みすず書房、一九九二年〉)、同、*Lectures et lecteurs dans la France d'Ancien Regime*, Paris, Editions du Seuil, 1987 (邦訳：R. シャルチュエ著、長谷川輝夫、宮下志朗共訳『読書と読者：アンシャン・レジーム期フランスにおける』〈みすず書房、一九九四年〉)、同(福井憲彦訳)『読書の文化史：テキスト・書物・読解』(新曜社、一九九二年。シャルチュエ一九九一年来日時に行った講演、インタビューの翻訳。内容的には、シャルチュエ前掲書、ならびに同、*Cultural history: Between practices and representations*, Cambridge, Polity Press and Ithaca, Cornell University Press, 1988 との共通点多し)など。また、McKenzie, D.F., *Bibliography and the sociology of texts*, Cambridge University Press, Cambridge, 1999, Ringer, Fritz K., *Toward a social history of knowledge: collected essays*, Berghahn Books, NY, 2000。さらには前掲、『知の歴史社会学』。ただし、Ringer の *The decline of the German mandarins: the German academic community, 1890-1933*, Harvard University Press, Cambridge, Mass., 1969 は例外であることは注記したいが、しかしこれも、「近世教育事実史」の諸研究のような、詳密な実証研究とは性質の異なるものである。
- 61 ただし清代考証学の全体像、ならびにその幕末儒者による摂取のされかたについては別に議論が必要であろう。濱口富士雄『清代考証学の思想的な研究』(図書刊行会、一九九四年)は、古代漢語の文字と音韻と、儒学の原



理の道との相関をとりわけ注視し、また、明学を批判しつつもその理義尊重の姿勢を継承したのが清学であるとし、近藤光男『清朝考証学の研究』（研文出版、一九八七年）は呉派と皖派の明確な違いを提示する。小島毅『宋学の形成と展開』（創文社、一九九九年）は、宋学を「道学」「理学」「心学」に限定し、狭小化せしめたのは清代の漢学者による操作であり、ある種の幻想であるとする。伊東貴之「明清思想をどう捉えるか－研究史の素描による考察」（奥崎裕司〈編著〉『明清はいかなる時代であったか』（汲古書院、二〇〇六年））は、これらの著書も含め、清代学問研究を網羅、最新の成果を提示する。これらの示す清代考証学の全体像とその特徴に鑑みると、音韻学については一堂に僅かに反映される以外は殆ど幕末儒学には継承発展させられておらず、また多くは、清代諸学の諸説の引用とその考証の緻密を受け継ぐにとどまる傾向がある。この学問特性も本稿の論旨と深く関係する。

尚、とくに近世中期以降の日本漢学の発達で、「所与の対象に対する集中、そして対象をめぐる細かで綿密な分析や方法の探求を生」み、「きわめて実証的・考証的な厳密さや、文法・語彙・用法などに対する注意深い方法を発達させた」ことは、既に黒住眞「漢学－その書記・生成・権威」（シラネ・ハルオ、鈴木富美編『創造された古典』（新曜社、一九九九年））、のち黒住「近世日本社会と儒教」（ぺりかん社、二〇〇三年）所収）に指摘がある（引用箇所は後者では二一六頁）。重要な指摘であり、筆者もこれに賛同する。さらに黒住は、明治以降も「漢語の働きが媒介・受け皿とな」り、欧米の知識・制度、思想内容の導入・構築が促された点も指摘（同二二〇頁）、本稿でも引用した敬宇の「漢学ノ下地」に関する論も引く（同二二八頁〈注四八〉）が、具体的に、漢学のどのような技能・技術に着目すべきか、それらが十八世紀からのいかなる学問発展を基盤とするか、さらには幕末以降の洋語／洋学習得のいかなる面に有用であったかを示すことが黒住のこの論考の目的ではない。本稿はこれらの点を踏み込んで検証するにむけ、どのような視座・方法が有効であるかを指し示すことを目的の一つとする。

- 62 一堂『論語知言』については拙著『幕末期武士／士族の思想と行為－武人性と儒学の相生的素養とその転回』（御茶の水書房、二〇〇八年）、とくに第七章ならびに「結論」、『老子王註』研究に関しては波多野太郎「老子王註に対する東条一堂の文献学的研究の価値批判」（内野熊一郎博士還暦記念論集『東洋学論集』〈漢魏文化研究会、一九六四年〉所収）、『詩経標識』については嵯峨寛による同書「解題」（『東條一堂著作集』）に詳しい。息軒『管子纂註』については『敬宇文集』所収の中村の賛辞がある。
- 63 吉川、前掲『『古事記伝』のために』（伊藤東涯。岡井眞吾「漢字の訓解と校勘の學」（徳川公継宗七十年祝賀記念『近世日本の儒學』〈岩波書店、一九三九年〉所収）。
- 64 「太宰春臺における古文の「体」「法」重視－古文辞「習熟」論に鑑みて」（笠谷和比古編『十八世紀日本の文化状況と国際環境』〈国際日本文化センター共同研究会成果論集〉、思文閣出版、二〇一一年所収）。
- 65 徂徠学の系譜につらなる儒者の関連著作では服部南郭（一六八三－一七五九）『文筌小言』、山県周南（一六八七－一七七六）『作文初問』、熊坂洲洲（一七三九－一八〇三）『文章緒論』などがあり、これらの考察も必須となろう。東涯は『作文真訣』（一冊、刊行年未詳）、『助字考証』（一七五一）、『助辞考』（二卷、一七一六）、『用字格』（四冊、一七三四）、『訓蒙字譜』（四冊）など、山本北山（一七五二－一八一二）は『作文志叢』『作詩志叢』『作文率』、帆足万里（一七七八－一八五二）も『修辭通』を著しており、これら徂徠－反徂徠諸儒者の著作の系譜的検討も、学問方法の発展に重要な示唆をもたらそう。皆川淇園（一七三五－一八〇七）の言語研究、ことに文字、助語辞研究は膨大であり、『助字詳解』『虚字解』『虚字詳解』『続虚字解』『実字解』がある。さらに幕末期のものでは斎藤拙堂（一七九七－一八六五）『拙堂文話』、海保漁村（一七九八－一八六六）『漁村文話』（嘉永五年〈一八五二〉）があり、とくに拙堂のものは網羅的である。
- 66 前掲『幕末期武士／士族の思想と行為－武人性と儒学の相生的素養とその転回』所収。
- 67 『東洋文化』（無窮会東洋文化研究所紀要）第百九号（二〇一二年十一月）所収。
- 68 岩波日本思想大系『荻生徂徠』（岩波書店、一九七三年）所収、のち前掲『吉川幸次郎全集』第二十三卷所収。
- 69 中村春作、市來津由彦、田尻祐一郎、前田勉編『訓読論：東アジア漢文世界と日本語』（ぺりかん社、二〇〇八年）所収。
- 70 『荻生徂徠全集』（みすず書房、一九七四年）第二卷（言語編、戸川芳郎、神田信夫編）所収。
- 71 黒住、前掲『近世日本社会と儒教』所収。
- 72 『二十一世紀アジア学紀要』（国士舘大学、二〇〇九年）所収。
- 73 『立正大学大学院紀要』（立正大学大学院文学研究科）十六（二〇〇〇年）所収。
- 74 同、四七、五二頁。
- 75 拙稿、前掲「太宰春臺における古文の「体」「法」重視－古文辞「習熟」論に鑑みて」
- 76 或は川口浩の指定するところの「頂点的」思想家次元との表現も適当であろう。川口「江戸時代の『経済思想

- 空間』(『政治経済学雑誌』〈早稲田大学〉第三四五号、二〇〇一年)。
- 77 武田『近世日本学習方法の研究』(講談社、一九六九年)、同「近世日本における学習方法の発達」(日本教育学会編『教育学論集』第一〈目黒書店、一九五一年〉)。石川謙『近世教育における近代化傾向：会津藩教育を例として』(講談社、一九六六年)、同『近世日本社会教育史の研究』(青史社、一九七六年。初版は一九三八年)、同『近世の学校』(高陵社書店、一九五七年)。
- 78 茂住、前掲『洋語教授法史研究：文法＝訳読法の成立と展開を通して』、とくに第二、四章。また、同、前掲「適塾の教育－教育方法と教授組織を中心に」、同、前掲「蕃書調所の英語教育」。
- 79 国際日本文化研究センター『日本研究』第四六号(二〇一二年)所収。
- 80 平沼淑郎『近世寺院門前町の研究』(早稲田大学出版部、一九五七年)に附録として所収。
- 81 田所美治編纂、菊池大麓『九十九集』(第日本図書、一九〇三年)。
- 82 石河幹明『福澤諭吉伝』一～四卷(岩波書店、一九三二年)のとくに第一巻の新銭座時代、三田移転当初についての記述に、慶應義塾での学習課程の記述がみられる。
- 83 Legge, James, D.D., *The Chinese Classics: With a translation, critical and exegetical notes, prolegomena, and copious indexes* (8 vols.), Hong Kong and London, 1861-1872 の第一巻第一冊所収の序文の語(訳は敬字)。筆者は敬字のサインが付され、多少の書入れのある広島大学図書館蔵の初版本(第一、二巻のみ)と、敬字蔵書印のある東京都立中央図書館諸橋文庫蔵の初版本を利用。
- 84 前掲、『敬字中村先生演説集』所収。
- 85 Ladmiral, Jean-Rene, *Traduire: theoremes pour la traduction*, Paris, Gallimard, 1994, p.XV。尚、ラドミラルさらにはシルヴァン・オルーの研究に関しては、中村春作、前掲「訓読、あるいは書き下し文という〈翻訳〉」を手掛かりとした。
- 86 上原麻有子「翻訳と近代日本哲学の接点」(『日本哲学史研究』第六号〈二〇〇九年〉)、三二頁。上原はこの論文で、「目標言語主義」は、「シニフィアンでもシニフィエでもなく、また言語の意味 sens でもなく、パロールやディスコースの意味」の翻訳に力を入れるとのラドミラルの主張を敷衍し、「目標言語主義」の重視するところは「言語体系の次元から見た言葉の意味」ではなく、実際の具体的場面で使用される言葉の意味」であると述べる。
- 87 Ladmiral, op.cit., p.11。
- 88 これらの表現は、西周「学問ハ淵源ヲ深クスルニ在ルノ論」(『学芸志林』二冊〈全七〇冊〉所収。のち前掲『日本近代思想大系』十『学問と知識人』所収)のものである。
- 89 Ringer, F., 前掲書。